

# 荒川村贅川における集落機能と生業形態の変化

河野 敬一・平野 哲也

## I はじめに

荒川村贅川は、秩父盆地南西部の荒川に発達した河岸段丘の下位段丘面の最上流部左岸に位置する。贅川地区の中心集落町分の標高は320m程度で、急峻な段丘崖を介して、荒川河床面と60m弱の比高がある。

秩父盆地の地質構造は、盆地の外縁部を秩父古生層がとりまき、その内側は、泥岩層や砂岩層がひろがっている。そして、ちょうど贅川付近が、秩父古生層と泥岩層との境界にあたる〔新井重三・菅野三郎(1960)〕<sup>1)</sup>。甲武信ヶ岳に源を発した荒川は、最上流部の大滝村を深いV字谷を形成しながら貫流し、荒川村に入ると贅川付近で谷幅を500m程度に広げる。これは、大滝・荒川村境付近で相対的に開析されやすい泥岩層に変わるため、比較的上流部にもかかわらず河谷の開折が進み、幅500mほどの広い段丘面が形成されたのである。贅川から約1kmほど下流の旧小野原村域に入ると、再び谷幅は狭くなる。そのため、左

岸の贅川および右岸の白久集落が存在する平坦地は、半ば山間小盆地のような地形であり、各方面への交通路が集中しやすく、また比較的広い河川敷は、筏流し等の水上輸送の結節点になりやすい条件を有していた(写真1)。

贅川は、こうした条件から、近世以前に町として成立し、宿場、商業等の中心機能<sup>2)</sup>が集積していたとされる。そのうち、町分と呼ばれる地区には、旧秩父往還に沿う300mほどの区間の両側に32軒の家が列状に並んでいる。しかし、現在の贅川は、町分集落の地割が短冊状で街村の面影を残しているほかは、雑貨小売商店と理髪店が1軒ずつ存在するのみで中心地としての機能をほとんど持たない。

筆者のひとり河野は、明治期から現在までの中心地システムの変化は、それ以前から存在していた小中心地が淘汰、あるいはより高次の中心地へ統合され、システムが単純化していくことを指摘した<sup>3)</sup>。しかし、明治期以降の近代化の流れの中で、小中心地がいかなるプロセスで消滅し、より高次の中心地の勢力圏に取り込まれていくのか、また、個々の小中心地が変容・消滅していく過程の中には、いかなる事情が存在するのかといった問題は実証的に明らかにされていない。

本稿では、荒川村贅川地区、とりわけ近世期以来の小中心地である町分集落を事例に、現在までの集落景観や機能の変化、そして生業形態の変化を明らかにするなかで、山間に存在する小中心地の変容過程を解明するための基礎的考察を行いたい。

## II 近世以前の贅川村

現在の町分の集落には、旧秩父往還沿いの家並みのほかに、往還より10mほど標高の高い丘陵地

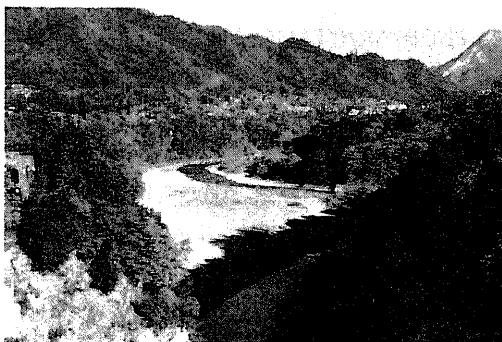


写真1 贅川集落と荒川の中洲

1990年11月11日撮影、左岸段丘上に贅川集落が位置する。写真正面が日向地区、左方が町分地区である。中洲の幅は、最も広いところで約200mである。

に、町並みを見おろすように独立して逸見彰臣家が存在する。逸見家の屋敷地面積は、他家に比べると広く、敷地内に氏神として柊木神社を祀っている。逸見家は甲斐武田氏の旧臣と伝えられる。このような逸見家の存在が、贅川の町の成立を考える手がかりとなろう。

次の史料は、鉢形城主北条氏邦が永禄5年(1562)に発給した判物である<sup>4)</sup>。

知行方之事、  
四貫三百文 藤田飯塚三有之 東方寺  
貳貫文 へ川有之 寶雲寺  
以上、六貫三百文  
右去年己来、数度走廻無比類候、為褒美彼地遣候、  
可致知行者也、仍如件  
永禄五年  
壬申十月十日 乙千代(花押)  
逸見藏人殿

この史料から、氏邦によって逸見藏人に寶雲寺領分のうち、年貢高貳貫文分の領地があてがわれていることがわかる。逸見藏人は、もと甲斐の武田氏の家臣で、永禄の頃、氏邦に仕え、その旗本となった者である<sup>5)</sup>。永禄5年の時点では、後北条氏は武田信玄と連合し、関東進出を図る上杉謙信と対峙しており、鉢形城を守る氏邦に対して、信玄からの援軍が多数派遣されていた。逸見氏もそのうちの一人であった。逸見藏人家の本流は、秩父郡野巻村(現、皆野町)に土着したが、あてがわれた贅川の領地に対して、一族・分家を遣わしたことが予想される。

贅川の逸見家が逸見藏人の一族の末裔であるとする、永禄5年に逸見氏が贅川に入った時には、既に贅川の街村状の町並みは形成されていたと推測される。逸見氏が町立てを行ったとすれば、宿の町並みに居を構える方が自然であろう。つまり、外来の土豪の逸見氏が町立てを行ったと考えるより、町が形成され交通の要衝として重要視されていた場所に、逸見氏が入ったと考える方が妥当であろう。このように、町分の町としての成立は、永禄5年以前と考えることができる。

贅川は、秩父盆地と甲州とを結ぶ道筋にある。しかも、贅川より先は峻険な山岳地帯が続く。そのため、贅川は秩父最後の宿場町となり得る立地条件を有していた。また、荒川の支流である贅川の谷は、両神村方面へ深く伸び、谷沿いに両神・小鹿野方面へ向かう往還が発達した。このようなことから、贅川の交通の結節点としての意義は大きく、中世末以来宿場として重要な意味を持っていたことが考えられる。こうした地点に、氏邦が逸見氏に領地を与えたということは、家臣団編成の策として意義あるものであった。

次に、近世期以降の贅川村の状況を概観してみよう。

贅川村の村高は、正保期に314.838石、その後若干石高を増し文化5年(1808)には、408.835石であった。近世初頭の天正18年(1590)より徳川氏に属し、その後江戸時代の間は長く幕府領であったが、天保2年(1831)に上野館林藩領、嘉永元年(1848)に川越藩領と、幕末期に二度の支配替えがあり、明治2年(1869)からは上野前橋藩支配となった。

写真2は文政期の贅川村絵図である。集落は、絵図上で小名として記されている。東西に流れる荒川に沿うように二つの大きな集落が確認できる。そこには、「贅川宿分」と「日向」と記されており、贅川沢が二つの集落を分けている<sup>6)</sup>。集落形態は、贅川宿分は道の両側に宅地が列状に並ぶ街村であるのに対し、日向は散村になっており現在の集落形態と大差はない。絵図では、彩色の違いによって土地利用の違いを表している。現況と比定してみると、集落のまわりに広がる黄色く彩色を施されている部分は畑であり、また、町分に点在する四つほどの四角形は、水田であると考えられる。このように、近世期の贅川村にはごく僅かの水田しかなく、畑にしても、極めて限られた面積しか存在しなかった。とりわけ、町分はその傾向が顕著であった。

近世期の町分は、宿場としての機能を持っていた。先に示した村絵図に「贅川宿分」と記されていたり、『新編武蔵国風土記稿』(以下『風土記稿』

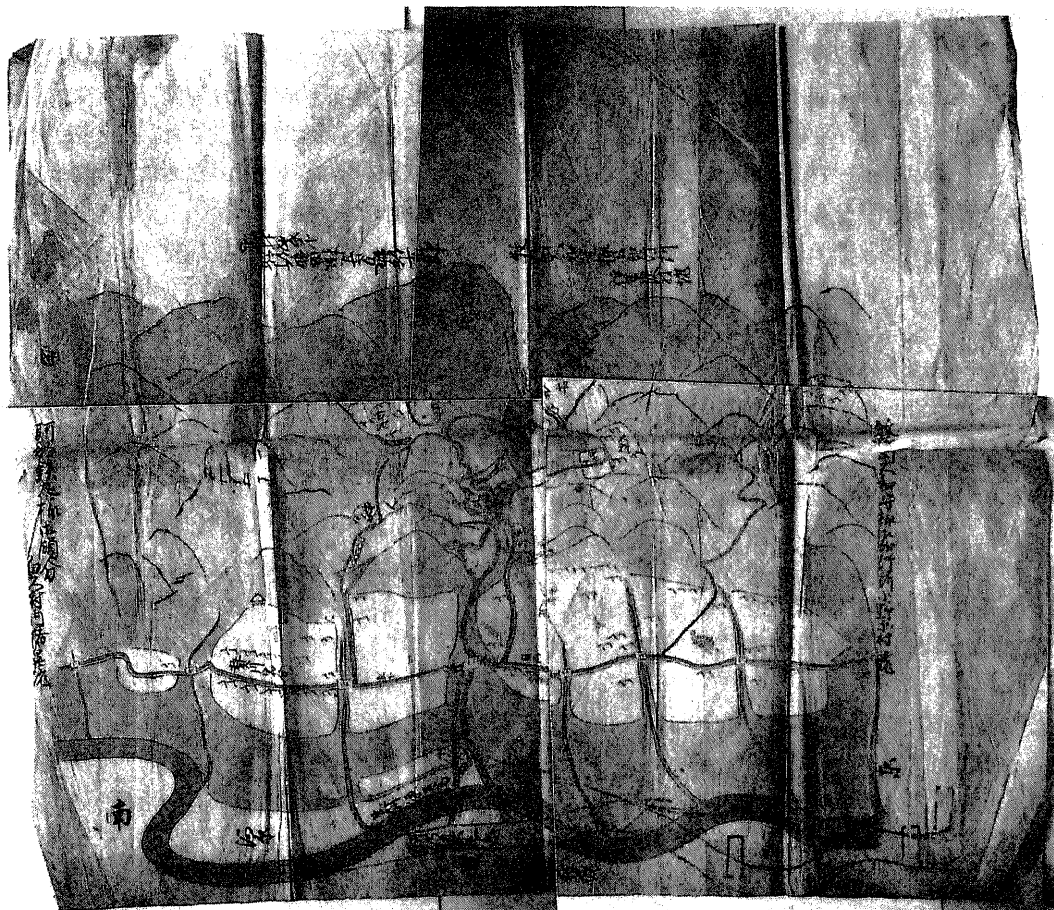


写真2 文政期の賛川村絵図  
(磯田才治家所蔵)

と略記)でも小名が「賛川町」と記されていることから推定できる。また、『風土記稿』に「此所は江戸より甲州への道筋にて、町と唱へるあたりは、左右に屋並みそろひて卅六軒ありて、寛文七年より毎月二七の日に市立せしが、今は廃して三月二日に雛市を立て、又は十二月廿二日・廿七日には市あるよし」<sup>7)</sup>とある。

市も、既に寛文7年(1667)に成立していた。17世紀中葉までに、小鹿野をはじめとして周辺に市立てがみられたことは、中世末から近世初頭にかけての秩父地域における活発な商品流通の展開を予想させる。16世紀末の秩父地域において、綿、漆などの商品が上納される年貢体系がみられたこ

ともそれを裏付けている。

賛川村では、江戸後期の生産物の状況から、絹や紙と米穀との交易が、市を通して行われていたものと考えられる。

文化期(1804~1817)に賛川村は元組、日向組、年番組という三つの組に分割される<sup>8)</sup>。このとき、町分は元組、日向は日向組、古池、大指等の山間小集落はまとめて年番組<sup>9)</sup>とされた。このように、町分が「元」とされていたことは、賛川の中心であったことを裏付けるものである。

また、17世紀中葉の「正保年中改定図」<sup>10)</sup>には「賛川町」と記載されている。この図中、他に「町」とされているのは、大宮町(現、秩父市)だ

けである。また、17世紀末の「元禄年中改定図」<sup>11)</sup>でも、贅川、大宮、小鹿(現、小鹿野町)のみが「町」とされている。このように、近世において贅川村は、町分が中心となり町場の機能を持っていた。これは、甲州、信州への交通路、三峰山への参詣路、荒川渡船など、交通の要衝に存在していたという条件が大きいと思われる。

近世期の具体的な贅川町の様子や機能は、資料的制約により明らかにし得ないが、少なくとも秩父盆地の中では、大宮や小鹿野などと比肩し得るような中心地であったことが推定できる。

### Ⅲ 町分の集落景観の変化

#### 1) 町並みの変化

町分の集落機能の変化を明らかにするために、まず、明治期から現在までの町並みの変化をみていこう。

先に述べたように、贅川は、町分、日向、古池・大指などの山間小集落の三つに大別される。そのうち、近世期以来の小中心地と認められるのは町分のみで、そのほかの集落は、農山村であった。そこで、本稿では、贅川の中で町分集落に注目し、考察を進めていくことにする。

過去の町並みを復原するのに役立つ資料は、清水武甲・千島寿(1983)<sup>12)</sup>が収集した写真類の他には見あたらない。そこで、「宿通り」と呼ばれる旧秩父往還(現在は県道54号線)に面した32区画の宅地を対象に、現住者からの聞き取りによって、明治期以降の町並みの変化を明らかにした。

まず、明治期の町分の町並みを示した(第1図a)。32軒中、中心機能を持つと思われるのは11軒であった。その他は農業や山林利用などによって生活していた<sup>13)</sup>。中心機能のうちもっとも多いのは、6軒存在する宿泊施設であった。宿通りの両端とほぼ中央に位置する3軒は比較的規模の大きな宿屋であり、残る3軒は、繁忙期のみ宿屋として営業する小規模な木賃宿であった。その他の商業・サービス業を列挙すれば、雑貨店2、豆腐店、理髪店、病院がそれぞれ1軒ずつ存在して

いた。

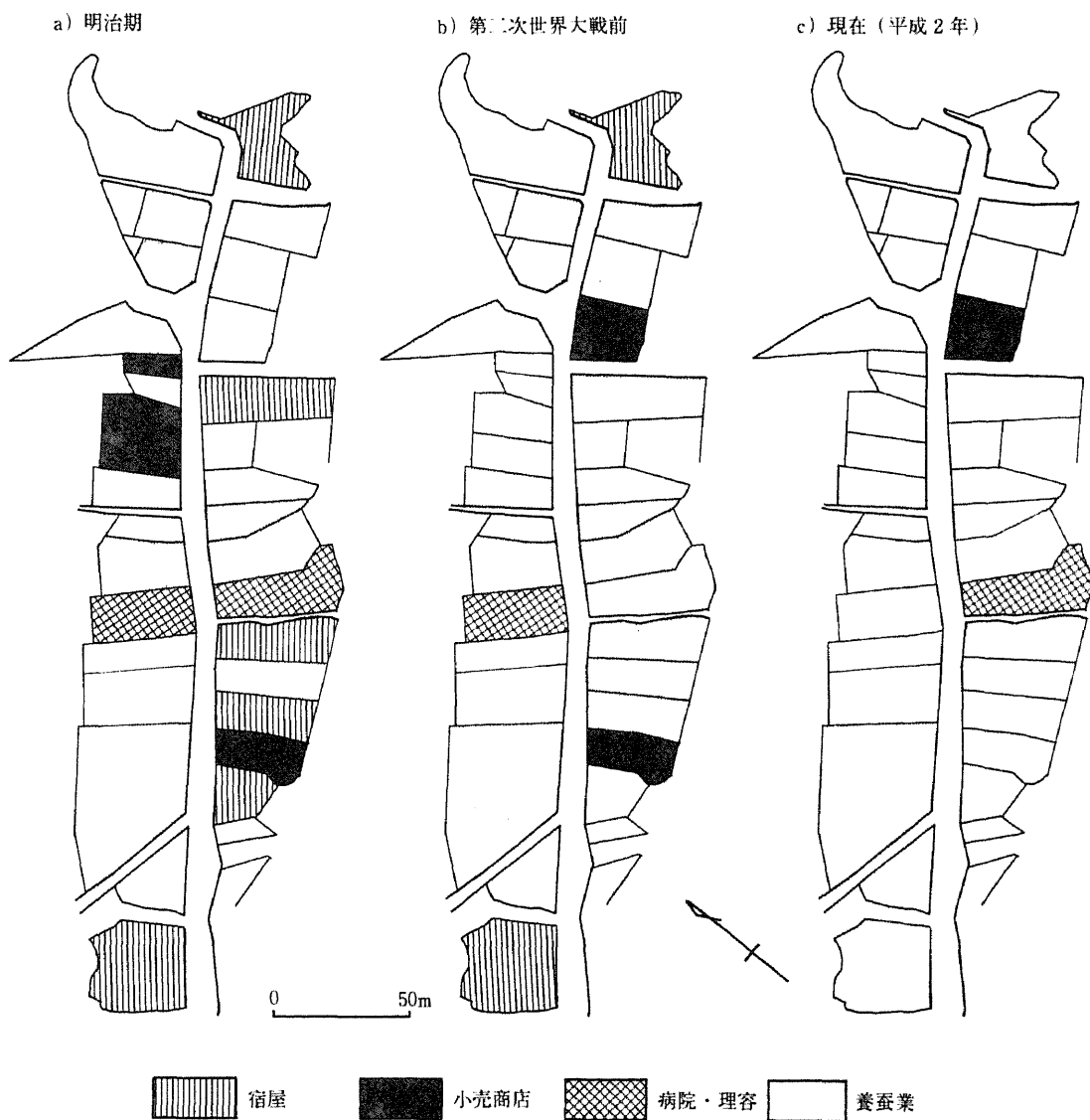
近世期から一行政村として存在していた贅川村は、明治22年(1889)の町村制施行の際に、対岸の白久村と合併し白川村になった。その際、村役場や警察官派出所は旧白久村地内に設置された。旧白久村への設置理由などは明らかにできないが、合併当時、白久の方が秩父郡役所所在地の大宮により近いこと<sup>14)</sup>、人口規模の面で白久村の方が多少優勢だったこと<sup>15)</sup>などが考えられる。行政機能が旧白久村に集積したことは、その後の白久への商業機能や交通機能の集積に拍車をかけることとなった。

町分では、明治初期に大火があり、集落の大部分を焼失した。そのため明治期の町並みは、必ずしも近世の状況を直接受け継ぐものではない。しかし、近世期以来の三峰参詣者の増加傾向や、後述する断片的な史料などから、明治期にみられるような宿屋などの中心機能は、近世期から存続するものであると考えてよからう。

第二次世界大戦前になると、贅川における宿屋は半減する(第1図b)。また、豆腐屋や雑貨屋なども消滅している。

昭和5年(1930)には、対岸の白久に秩父鉄道の三峰口駅が開設された。また、それまで渡船に頼っていた贅川・白久間に白川橋が架橋された<sup>16)</sup>。こうして、秩父参詣者は秩父鉄道を利用し、三峰口駅から白川橋を渡り贅川宿を通らずに参詣できるようになった。鉄道駅の開設にともない、次第に三峰口駅周辺に中心機能の集積が見られるようになった<sup>17)</sup>。町分に明治期以来存在した雑貨屋や豆腐屋が駅周辺に移転するなど、商業機能の移動が見られた。このように、昭和初期になると、宿屋は一部残存しているものの、明治期に見られたわずかの中心機能のほとんどは贅川から消滅した。

この頃まで、町分の宿通りは、3m程度の幅員であったが、昭和3年(1928)に、各家が前庭を1mずつ無償で提供し、現在のような幅員5mの宿通りができあがった(写真3)<sup>18)</sup>。現在でも、道路と各家の軒との間には1.5~2mほどの空間が



第1図 明治期の町分の町並み  
（聞き取り調査および平成2年6月の実地調査により作成，酒井貴己子作図）

ある。そこは、穀物の乾燥の場や、春の雑市や歳  
の市の出店場所として用いられていたという。

現在の町分に存在する商業・サービス業は、宿  
通りと両神村方面へ通じる県道54号線との交差点  
付近にある雑貨小売商店と宿通りのほぼ中央部  
にある理髪店だけである（第1図c）。昭和初期まで  
に見られた宿屋や一部の商店は、第二次世界大戦  
中と昭和30年代からの高度成長期にすべて消滅し

た。一方、昭和初期に成立した白久の三峰口駅前  
集落も、現在は駅前にみやげ物や観光客を対象に  
した食堂が散在するだけで、中心機能の衰退傾向  
がうかがえる。

昭和32年（1957）に始まる国道140号線の改良  
により、現在では30分弱で秩父市に行くことが  
できる。そのため、現在の荒川村賛川・白久地区の  
生活行動は、秩父市の影響下に入っているというこ

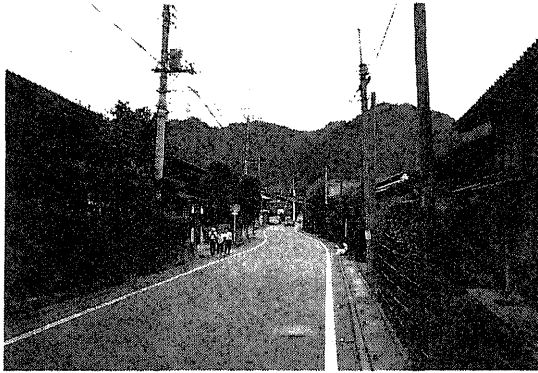


写真3 現在の町分の「宿通り」

(1989年10月4日撮影, 現在の幅員は5mで,  
道路と家の軒との間に1.5mほどの前庭がある)

とができる<sup>19)</sup>。

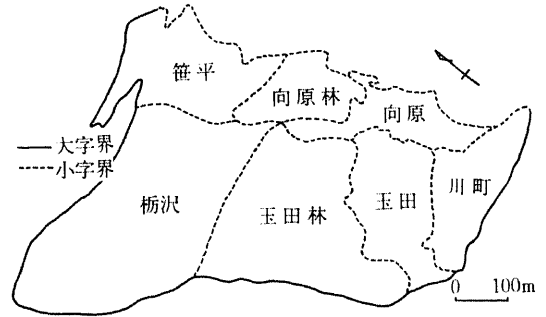
## 2) 土地利用の変化

次に、明治初期から現在までの町分地区の土地利用の変化をみていこう。ここでは、現在の荒川村大字贅川のうち字川町、玉田、向原、向原林、玉田林、笹平を町分地区として復原を行う(第2図)<sup>20)</sup>。

まず、土地台帳<sup>21)</sup>の台帳地目により明治前期の土地利用の状況を復原した(第3図)。

明治前期の町分は、宿通り沿いの宅地列を中心に南北幅300m程のわずかの緩傾斜地(段丘面)に畑がひらけていた。水田は、宅地列の北部の水路沿いに、沢水を利用したものが唯一存在していた。この水田は、先に示した文政期の絵図(写真2)にも見られる開発の古いものである。しかし、その面積は5筆2,120m<sup>2</sup>に過ぎない。字玉田林、栃沢、笹平といった山間傾斜地にも畑の利用がみられる。これらは、焼畑として利用されていたものが多い。このような山間の畑は、のちにすべて山林に地目変更された。

次に、現在の土地課税台帳<sup>22)</sup>の現況地目を用い、現在の土地利用状況を復原した(第4図)。旧秩父往還に沿う宅地列の他に、北側の緩斜面上にいくつかの宅地が出現している。これらの多くは、宿通り沿いの家からの分家である。緩傾斜地の畑



第2図 町分地区の小字  
(「荒川村土地法典」により作成)

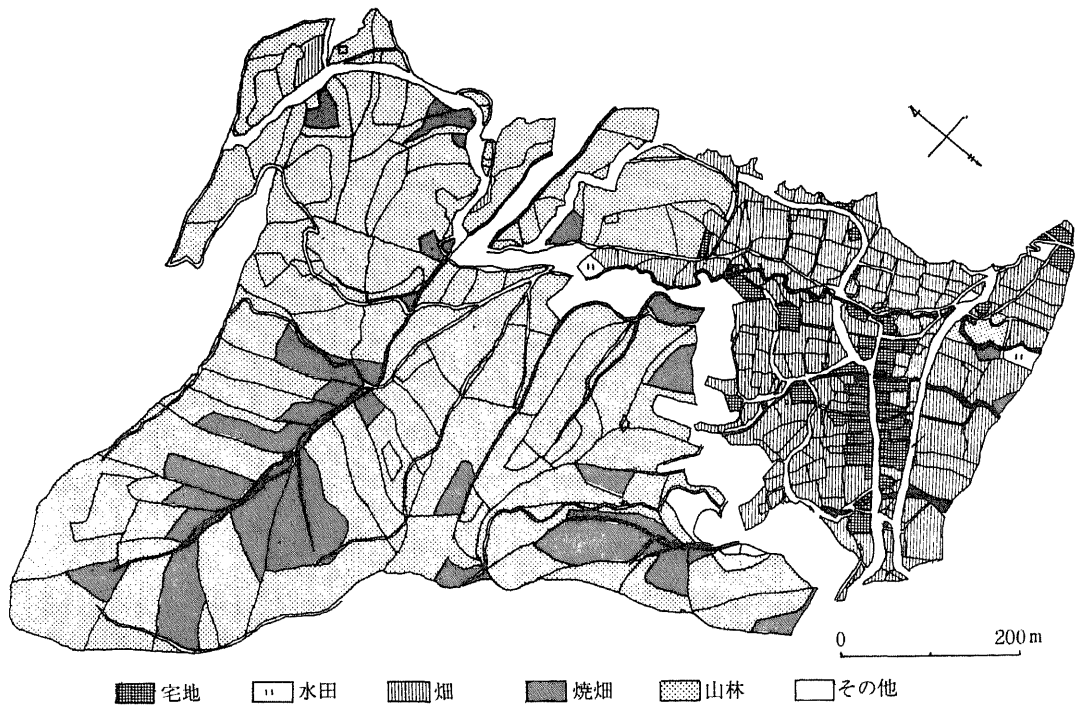
は、桑、栗、梅、柿などの樹木のほか、大豆、小豆、芋類などが自給用に栽培されているが、粗放的な利用である。山間傾斜地はすべて山林であり、比較的集落に近い一部が桑畑などに利用されている他は、スギ、ヒノキなどが植林されている。

## Ⅳ 明治期以前の贅川村の生業

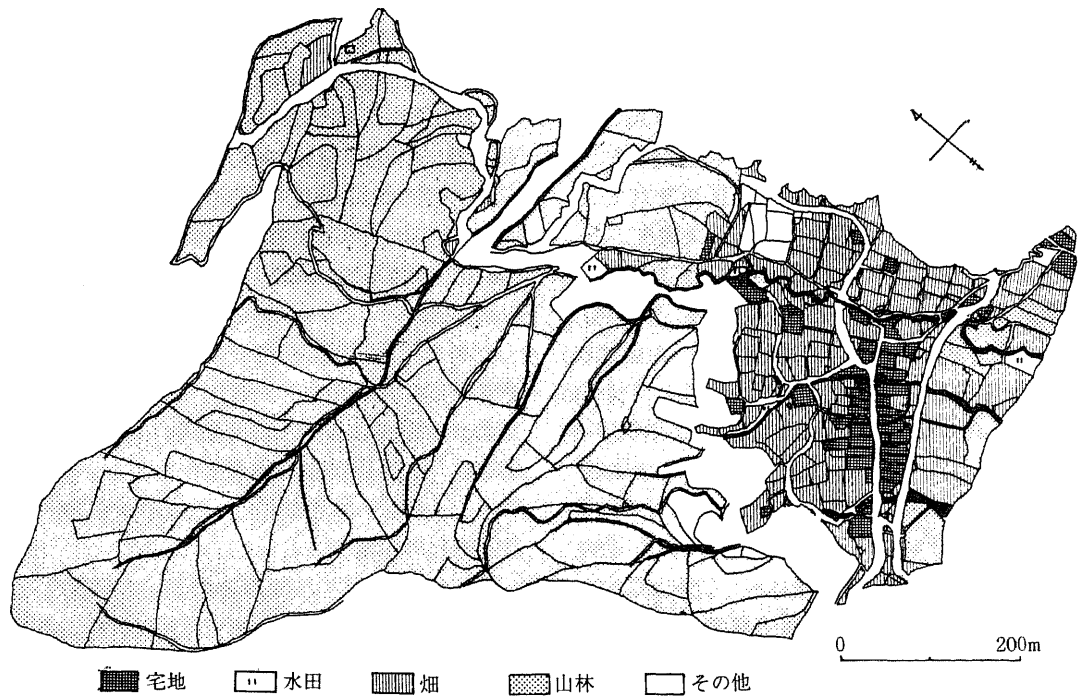
### 1) 農業経営と土地所有

江戸時代後期に、408,838石の村高を有していた贅川村における農業生産の状況はいかなるものであったのだろうか。まず、慶應元年(1865)の「高反別三組仕出帳」<sup>23)</sup>から、幕末期の村の田畑の構成比が明らかになる(第1表)。一見して、畑がちの村落で、位付けの低いものが多いことがわかる。

また、文化8年(1811)以降成立した贅川の三つの組ごとの持高と反別をみると三つの組の持高・反別には大きな差異がみられる。日向組は213石余(約67町)であるのに対し、町分のある元組は87石余(約33町)である。年番組は107石余の高を持つが、山間小集落を一括したものであるため、それぞれの集落ごとの数値は、さらに細分されるであろう。日向組と元組とは、先に示した村絵図(写真2)からみると、ほぼ同規模の集落と考えられる。したがって、両組の耕地面積の差は、畑作農業への依存度の違いを表している。つまり、元組は「町分」あるいは「宿分」と呼ばれるとおり、商業や



第3図 明治前期の土地利用  
(浦和地方法務局秩父支局所蔵「土地台帳」により作成、三木一彦作図)



第4図 現在(平成2年)の土地利用  
(荒川村税務課の現況地目資料により作成、三木一彦作図)

第1表 幕末期贅川村における田畑構成

	元 組	年 番 組	日 向 組	贅川村合計
石高(石)	87.88	107.622	213.336	408.838
高永(貫)	17.576	21.5224	42.6672	81.7566
	(町・反・畝・歩)	(町・反・畝・歩)	(町・反・畝・歩)	(町・反・畝・歩)
上田	0	0	1. 2. 16	1. 2. 16
中田	0	0	5. 0. 24	5. 0. 24
下田	6. 6. 2	6. 6. 1	8. 5. 17	2. 1. 7. 20
上々畑	0	0	1. 5. 8. 15	1. 5. 8. 15
上畑	4. 1. 4. 13	4. 1. 6. 29	8. 8. 0. 13	17. 1. 1. 25
中畑	3. 8. 3. 24	6. 6. 4. 16	12. 3. 9. 17	22. 9. 2. 27
下畑	8. 5. 5. 20	11. 8. 2. 18	11. 7. 9. 19	32. 1. 7. 27
下々畑	15. 2. 9. 19	14. 7. 2. 22	29. 3. 2. 26	59. 3. 5. 7
屋敷	1. 0. 9. 28	1. 2. 7. 7	1. 7. 4. 13	4. 1. 1. 18
反別合計	33. 6. 4. 16	39. 3. 0. 3	67. 1. 4. 10	140. 0. 8. 29

(慶應元年11月「高反別三組仕出帳」(磯田才治家文書)より作成)

宿屋業に携わり、同じ村のなかでも、畑作農業への依存度は相対的に低かったと考えられる。

さらに近世期の贅川における土地条件についてみていこう。

『風土記稿』によると、贅川村は、「田畠山林の分量を云はゞ、多くは山林にて、陸田は至て少く、水田は谷田にて又僅ばかりなり、土症は赤真土少く、黒野土赤野土石交りの所多し」と記されている<sup>24)</sup>。また、天保4年(1833)の史料には<sup>25)</sup>、「当村方之儀者山中岩崩片蟻峨石交り之悪地味ニ而剩田畑少く谷合之盆村」とあり、贅川村は、農業生産という面では、劣悪な条件下にあったことが明かである。また、自然災害も受けやすく、「水旱の患は本より山間の土地なれば、雨多ければ作物実登りあしく旱すれば痛み易し」<sup>26)</sup>という有り様であり、猪鹿による被害も少なくなかった。

このように、耕地を制限された贅川村での近世の生業の様子について、『風土記稿』には、「男女の稼農間には柴薪を采り、或は材木筏流しなどし傭銭を取る、女は養蚕の外、絹・横麻を織出せり、産物には即ち絹・横麻或は煙草・青豆・黒豆・楮・干柿等あり」と記されている。

文化14年(1817)の年貢割付状<sup>27)</sup>をみても、米

納分は9.139石に過ぎず、永(銭)によっては117貫990文3分もの年貢が課せられている(第2表)。米穀生産が乏しく、畑作物生産が主体であったことが明かである。

そして、年貢永納分の一部を占める小物成の存在を看過できない。小物成の品目をみると、160文の「百姓山銭」が徴収されている。永3貫574文の「紙船役(紙漉槽)」は、楮が産物であった事実を合わせ考えると、紙が生産されていたことをうかがわせる。また、「絹綿売出し」という名称で永1貫164文の税が賦課されており、これは、養蚕業と絹の織出しが実施されていたことを物語るものであろう。

天保4年(1833)の時点では<sup>28)</sup>、絹、横麻、煙草、板木などを売り出し、武蔵国大里郡、榛沢郡、児玉郡や上野国などから穀物を買入れしていた。制限された土地条件のため水田化がみられず、稲作はほとんど行われていなかったものの、畑利用の商品作物の生産がみられた。

贅川村において自給自足経済は存在しなかった。むしろ、こうした山間村落こそ、商品作物生産や加工品生産が展開していたのである。貨幣を媒介に、贅川村の商品と他地域の米が流通し、貨幣経済は村人の生活の奥深くに滲透していた。ま

第2表 江戸時代後期賛川村における年貢の状況

年貢の種類		納入形態	年貢額
本年貢		米(石) 永(貫)	8.076 111.9582
見取畑		永(貫)	0.073
小物成	百姓山錢	永(貫)	0.160
	紙船役	永(貫)	3.574
	酒造冥加	永(貫)	0.039
	絹綿売出	永(貫)	1.164
高掛物	御伝宿入用	米(石)	0.245
	六尺給米	米(石)	0.818
	御蔵米入用	永(貫)	1.0221
年貢納合		米(石) 永(貫)	9.139 117.9903

(文化14年10月「丑年貢可納割附之事」(磯田才治家文書)より作成)

た、山稼ぎや絹の織出し、紙漉きなどの余業に労働力が投入されていた。

さて、明治期の賛川村の農業は、どのようなものであったろうか。明治初期の各村の状況を示すものと思われる『武蔵国郡村誌』には、賛川村は「色黒赤或は砂石を混し稲梁に適せず麦桑に適す」<sup>29)</sup>とある。時代が下っても、稲作を行うには困難が伴い、逆に、そうした条件が畑作や養蚕に適していることを示している。

また、明治13年(1880)の物産表<sup>30)</sup>にみられる賛川村の物産は「生糸、絹、材木」であり、明治前期の養蚕と山林利用の盛行を思わせる。また、武蔵国郡村誌に記されている物産は、繭110石、香魚(鮎)3,500尾、やまめ300尾、椿28駄、蓼(煙草)750斤、絹40疋、生糸50貫目である。畑作、養蚕にかかわる生産物ばかりが挙げられている。

## 2) 宿場町としての機能

賛川は交通の要衝であり、中世から宿場としての機能を持っていた。天保14年(1843)の史料によると、「当村之儀者毎月二七日市場<sub>ニ</sub>而殊<sub>ニ</sub>三峰山参詣之者<sub>并</sub>甲信兩州<sub>江</sub>之旅人通行いたし他郷之者

多分入込候義<sub>ニ</sub>付諸商ひ是迄之通り渡世仕度奉願上候(後略)」<sup>31)</sup>とあり、近世期には三峰参詣者や山梨県、長野県方面への旅人の宿場であり、2・7の六斎市が開催される市場町でもあったことがわかる。

三峰山は修験の山で、江戸時代中期以降、農業や火伏せ盗賊除けの神として庶民の間で信仰が盛んになり参詣者が増加した<sup>32)</sup>。三峰神社の参詣者は講を組織して訪れる。それぞれの講は、代参者1～2名を立てて春秋1回ずつ定期的に参詣に訪れるので定宿が決まっていた。大滝村の三峰神社宿坊に宿泊する者もあったが、参詣を終えるとすぐに下山し、賛川の宿屋を利用するものも多かった。

明治期の賛川には「角屋」、「角六」、「丸太」、「逸忠館」、「小櫃屋」、「油屋」という6軒の旅館が存在した。このうち、小櫃屋は、現存する宿の版本などから天明期(1781～1788)創業、逸忠館は嘉永期(1848～1853)創業であり、いずれも近世期から営業していた。

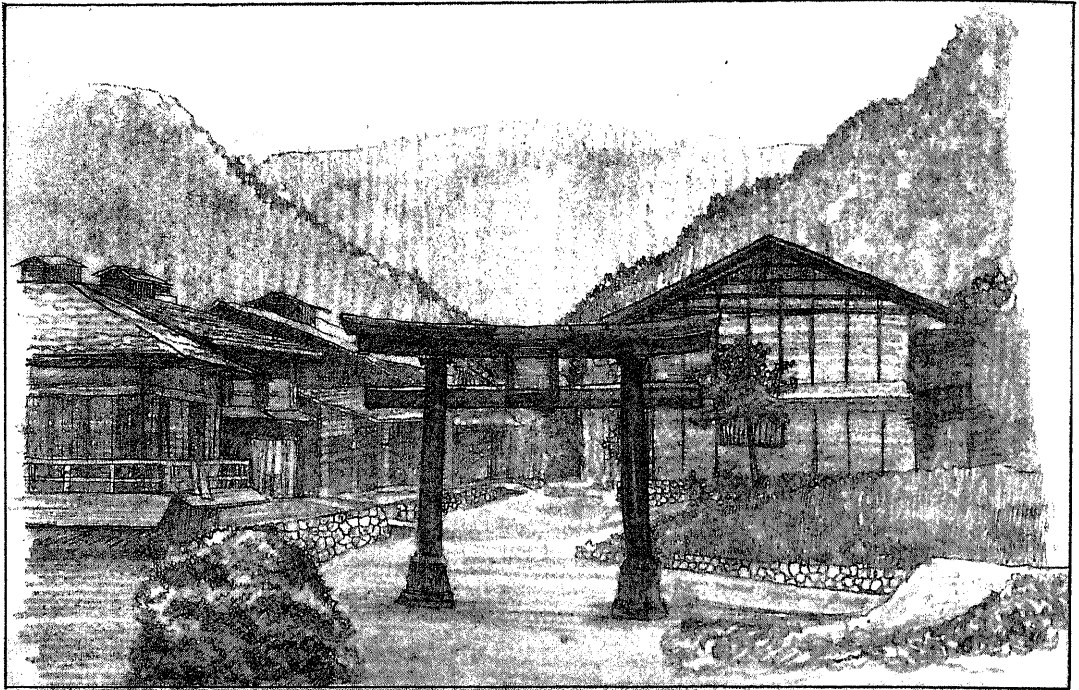
明治期には、このうち「丸太」、「小櫃屋」、「油屋」は繁忙期のみの営業であった。また、この6軒の他にも、特定の三峰講中が参詣に訪れたときに宿泊させる家があった。このように、明治期までは専門的あるいは副業的に宿場機能にかかわっていた家が多かった。

近世期以来、町分の東の入口には三峰神社の一の鳥居が存在し、三峰神域の入口とされていた(第5図)<sup>33)</sup>。当時は、賛川から三峰神社までの約10kmは、険しい山越えのルートだったため、参詣の前夜に賛川で一泊し、翌朝早く発って三峰神社へ参拝し、夕方再び賛川へ戻り、さらに一泊して帰郷するという行程が一般的であった<sup>34)</sup>。

## 3) 木材・薪炭の生産と流通

賛川村では、豊富な山林資源を利用した生業を確立させていた。近世期の賛川村は、材木を伐り出し、柴や薪を採集し、それらを売り払い、筏流しという形で輸送にも携わっていたのである。

木材の売り出しの重要性は、以下の史料からも



第5図 町分地区にあった三峰神社一の鳥居（明治後期頃）  
 （白久側の入口より町分の町並みを望む。左手前の二階建ての建物は「角屋旅館」、  
 清水武甲・千島寿(1983)をもとに河野紀子作図）

推定できる<sup>35)</sup>。

私共村々之儀ハ極山中谷合之場所等ニ而作物之地所  
 微々、夫食半斗之貯ニも引足り不申候ニ付、百姓一統  
 深山ヲ切開、杉檜雑木等ヲ仕立置手入出精仕、年々  
 分限ニ応じ伐木いたし売払代金を以御年貢御上納并夫  
 食不足之手当家内暮方漸取統罷有候次第ニ御座候(後  
 略)

周囲を山に囲まれ、耕作可能地面積が限定されていたが、賛川村には豊富な山林資源があった。そして、「極山中」に生活する百姓の目は山林資源の活用に向けられていた。山林は、木材・薪炭といった商品を生み出し、伐り出した材木の輸送は労働力の需要を高め、現金収入源となる。それゆえ、百姓は自らの力で「深山ヲ切開」き、植林、伐木を進めていったのである。そのため、幕府も、ある程度の山を百姓稼山として村民に渡さなければならなかった。賛川村の上流部に位置する大滝

村では、幕府は享保18年(1733)に、縦20里、横4里の御林のうち、およそ1里半四方を百姓稼山として大滝村民に割譲している<sup>36)</sup>。このようにして、村人に山の利用権が与えられ、そこに、鞆木、下駄木がわ、笹板、羽子板、桶木などの木材加工品の生産が展開していくのである。

明治13年(1880)の物産書き上げ<sup>37)</sup>には、賛川村の生産物のひとつとして材木があげられており、明治初期にも、山林資源の利用が盛んであったと考えられる。明治初期の土地台帳<sup>38)</sup>から、町分区の状況に限ってみると、山林所有者は多数存在し、山林数百町歩<sup>39)</sup>を所有する古池大尽と通称されるほどの山林地主(V家)<sup>40)</sup>が生まれていた。

次に、木材・薪炭などの生産物がどのように流通したのかという問題に目を転じてみよう。賛川村での木材・薪炭の流通の変化を考える場合に、筏流しが主軸になっていたことを、まず指摘しな

ければならない<sup>41)</sup>。

費川村における筏流しは、近世も初期の頃から始まっていた。明治43年(1910)の「河川ニ於ケル流材取調ニ関シ山林局長へ回報案伺」<sup>42)</sup>によると、流材は寛文期(1661～1672)に開始されてから、年々継続してきたとある。また、流材の区域については「秩父郡大滝村大字大滝字栃本ニシテ荒川ヲ流下シ東京市場ニ至ル」というルートが示されている。

荒川の費川より上流の区間は、河床が深く川筋も細い。ところが費川村に入ると、中洲が形成されるほど一挙に川幅を広げる(写真1)。大滝村内で一本ずつ管流しされた材木は、費川村の中洲で筏に組みかえられ、莫大な需要を持つ江戸に送られた。

さらに、大滝村に幕府直轄の御林山が存在していた。そのため費川村は、幕府の検査役人の休憩・宿泊の場となり、長期間、幕府直轄領(天領)とされていた<sup>43)</sup>。このように、幕府からも、費川村は木材管理の重要地点と目されていたことがうかがえる。費川村名主の小櫃伴平が材木検査役を勤めたことが伝えられており、「不動高倉ようやく越えてそれでも怖い小櫃伴平」という一句が、間接的にその事実を証明している。

具体的に、近世期の史料から、荒川を利用した木材輸送の状況についてみてみよう。天明3(1783)の史料は<sup>44)</sup>、荒川の舟運と筏流しに関する訴訟である。秩父郡・榛沢郡・男衾郡の「荒川附村々」が、荒川の「通路差塞」を行った大里郡押切村(現、大里郡江南町押切)の不法を訴えている。この史料からは、天明期には荒川舟運による物資輸送が成立しており、それは費川村より下流で行われていたことが判明する。荒川の舟運が発達したことは明かではあるが、上流部の費川村周辺における状況については必ずしも明らかにし得ない。明治20年代の荒川流域舟運の状況についての調査によると、航路の概況は、「荒川幹川埼玉県管内航路ハ秩父郡白川村大字白久ニ始マリ北足立郡吹上村大字大芦ニ至ル、此間十八里十八町ヲ筏路トス、而シテ舟運ハ大芦ヨリ開始シテ」と記

されている<sup>45)</sup>。舟運は主として大芦(現、北足立郡吹上町大芦)より下流において盛んであったと考えられる。白久・費川両村の付近では、舟運はあったとしても小規模で、むしろ筏路としての河川の利用が主であったのではなかろうか。

続いて、先に指摘した天明3年の史料の後半にある、筏流しに関する訴えの部分を見てみよう。

同州荒川附村々之義は秩父郡費川村より男衾郡村々迄は道法凡拾式三里も有之、両側山付之村々ニ面御年貢御帳面之内江諸木立置、例年筏師共江売渡江戸廻仕、御年貢<sub>江</sub>渡世足り合<sub>ニ</sub>仕来、殊<sub>ニ</sub>右川筋筏川下ヶ之節は人足共多分罷出賃銭取之年来渡世仕候、筏師之者共ハ右立置候諸木買請江御屋鋪様方<sub>江</sub>筏間屋江差出し代金ヲ以村々渡世経、(後略)

このような主張をしている「荒川附村々」のなかには費川村も含まれていた。先に述べたとおり、費川村にとっては、木材を換金することが生計を成り立たせるうえでの必須条件であった。伐り出した木材を筏師へ売り、荒川を流し下して江戸へ送ることではじめて「御年貢<sub>江</sub>渡世足り合<sub>ニ</sub>仕来」ることが可能となった。また、費川村には、大滝村から流れてくる木材を順調に下流へ送り流す役目があった。したがって、輸送路である荒川の安全確保は、費川村にとって大きな関心事であった。これはまさに「荒川附村々」に共通する大きな問題であった。

また、単に商品としての木材のみが村人の収入源になっていたのではない。筏流しの労務が村人の農間渡世として存在していた。専門の筏師以外にも、筏流しや川下げには多くの人足が必要とされ、村人からの労働力提供が不可欠であった。こうした臨時雇いの駄賃稼ぎも、重要な現金収入源になっていたのである。さらに、費川のように、多量の材木の中継・産出を行う村では、村外からの人足も多く入り込む可能性がある。費川村は、村外から来た人足の止宿の場としての機能を果たしていたことが考えられる。このように、筏流しに深くかかわっていたことが、費川村を維持するための重要な条件であった。

さて、筏流しは、近代以降、どのように変化していったのであろうか。明治中後期ごろまでは、明治13年(1880)の賛川村の主要物産に木材があることや<sup>46)</sup>、先に示した明治20年代の荒川航路の概況を示す史料に、賛川の対岸の白久から吹上村大芦までが筏路となっていたことから、筏流しの重要性はなおも衰えていなかったと考えてよからう。そして、大正期や昭和初期にかけても筏流しは行われていた。材木の樹種は、主としてスギ、ヒノキ、カツラ、ブナ、ツガなどであった。当時、旅館「角六」を経営していた磯田家(現在は千島家)が材木商を兼営していた。

## V 集落機能と生業形態の変化

### 1) 農業の変化

#### (1) 畑作

明治初期、第二次世界大戦前、現在の3時点での町分地区における土地所有状況を、家別・地目別に集計して、第3表～第5表に示した。畑地の所有は徐々に減少している。近世以来、僅かにみられた水田は、現在ほとんど存在しない。個々の畑地所有についてみると、3時点を通じて所有を減少させるのは7軒である。また、明治期から第二次世界大戦前までの間に所有を増加させるものの、それから現在までの間に所有を減少させるものが11軒数えられる。逆に、現在までの間に所有規模を増加させるものも僅かに存在するが、その増加率は大きいとはいえない。このような土地所有規模の変化から、もともと規模の小さい畑作農業は、明治期以降、現在に至る間に、一層その規模を縮小していることが明らかである<sup>47)</sup>。

明治期以降の町分における畑作は、自給的な要素が強かった。なかにはB<sub>1</sub>家のように、麦、大豆、芋類を栽培し、農協を通じて販売していた経験を持つ家も存在したが、畑地を所有する家のほとんどが、雑穀類や茶の栽培を自給的に行っていた。また、土地台帳から、昭和初期まで山間傾斜地を利用して焼畑が行われていたことがわかる<sup>48)</sup>。焼畑とほぼ同様の意味を持つ切替畑の存在は、既

に近世期に存在していたことが確認できる<sup>49)</sup>。聞き取りによって明らかになる焼畑の方法は次のようなものである。スギやヒノキが植林されていた山間地を皆伐し、そこに火入れを行う。その後、新たにスギやヒノキの苗を植林すると同時に、大豆、小豆、粟、稗などの種を散播して栽培する。6～7年経過すると、植林した樹木の横枝が張ってくるので、畑作ができなくなり育林に専念する。造林はきわめて長期間必要なため、切替期間は40～50年におよぶ。焼畑が行われる土地は、個人所有であるが、皆伐から火入れなどの作業は共同で行われ、その代償として数年間の畑作の権利を与えるのである。

このような形態は、火入れ後3～4年間耕作を行い、その後、その土地を放棄するという、伝統的な焼畑耕作の形態とは異なる。聞き取りで得られた耕作形態は、育林を主体とし副次的に焼畑を行うものと考えられる。これは、佐々木高明(1972)<sup>50)</sup>や藤田佳久(1981)<sup>51)</sup>の指摘する「造林前作用焼畑」と位置づけられよう。藤田によると、昭和初期の焼畑の多くはこうした形態であり、埼玉県においては、焼畑面積の80%以上を占めていた。聞き取りや土地台帳の地目に見られる焼畑は、自給的な穀物生産を主体とした農業というより、山林利用の一形態と見るべきであろう。

こうした焼畑が、明治期の町分地区においては30,000m<sup>2</sup>以上存在し、その多くは先に示した第3図にみられるように、比較的出入りの容易な沢沿いの傾斜地であった。これらの多くは、明治後期から第二次世界大戦前後までの間に、山林に地目変更がなされた(第6表)。

#### (2) 養蚕

次に、町分区における明治期以降の養蚕の展開についてみていこう。

新井寿郎(1963)の時代区分を援用すると<sup>52)</sup>、明治23年～昭和5年(1890～1930)の間は、埼玉県における養蚕の発展期であり、生糸輸出の発展や繭価の高騰などから、非常に有利な生業であった。町分にあっても、この時期は、養蚕業の規模拡大

第3表 明治初期の町分地区の土地所有

(単位: m<sup>2</sup>)

所有家	宅地	田	畑	山林	その他	合計
A	401	0	1,316	0	6	1,723
B <sub>1</sub>	0	0	3,915	20	28	3,963
B <sub>2</sub>	503	16	4,922	4,714	0	10,156
C	439	0	4,220	119	29	4,806
D	402	348	5,913	8,855	0	15,518
E	0	0	0	0	0	0
F	323	0	6,515	435	0	7,273
G	499	816	3,327	1,033	0	5,674
H	518	0	3,196	99	0	3,813
I	507	0	9,019	8,133	0	17,709
J	1,000	0	796	1,488	0	3,284
K	309	0	3,270	3,604	0	7,184
L	694	0	422	0	0	1,116
M	301	0	311	0	0	612
N	518	0	1,843	1,487	0	3,848
O	424	0	3,110	3,426	0	6,960
P	207	0	1,008	0	0	1,215
Q	339	0	7,391	742	0	8,472
R	120	0	1,380	3,100	0	4,600
S	508	0	1,100	0	5	1,613
T	408	0	4,448	6,065	0	10,921
U <sub>1</sub>	1,021	521	10,223	7,285	198	19,248
U <sub>2</sub>	225	0	0	0	0	225
V	3,163	419	35,736	34,365	0	73,684
合計	12,832	2,120	113,381	85,019	266	213,619

(浦和地方法務局秩父支局所蔵「土地台帳 費川」により作成)

がみられた時期であったと思われる。

大正2年(1913)6月6日には、町分の横田琴三郎を組合長として埼玉組白川組という組合製糸が発足し、生糸の共同販売を開始している<sup>53)</sup>。出資金は一口20円を要し、存立期間は20年とされた。大正15年(1926)度末の状況を示せば<sup>54)</sup>、新井松二を組合長とし、115名の組合員が所属していた。出資総額は7,530円で、そのうち払込済出資金は3,339円であった。また、5,425円を借り入れている。その時の製糸高は411貫で、白川村に存在していた三つの組合製糸の中で最も多く<sup>55)</sup>、釜数は50を数え、製糸価格も38,275円にのぼった。昭和2年(1927)度の生糸の売行きを第7表に示した<sup>56)</sup>、この頃が町分における養蚕業の最盛期であったと考えられる。昭和4年(1929)には、埼玉県によって白川組と日向組の合併案が出される

が、白川組が難色を示し実現しなかった経緯がある<sup>57)</sup>。この時期に、白川組は独自に十分な利益を確保できる状況にあったため、合併を望まなかったと推測される。

しかし、第8表によれば、昭和4～5年のわずか1年の間に、白川組の生糸生産販売量は511貫399匁から394貫792匁へと約25%減少している。販売金額では、38,751円から16,737円へと半分以下の落ち込みをみせ、昭和7年頃には、白川組も解散を余儀なくされた<sup>58)</sup>。

町分における養蚕の最盛期の頃の状況を、1家の事例からみていこう。1家では、旅館業を廃業した明治後期以降、大規模に養蚕を始めた。当初は、春蚕、晩秋蚕の2回の繭取りが行われた。同家は、山の斜面を利用して、50a以上の桑畑を所有していた。スギを売り自力で山野を開墾して桑

第4表 第二次世界大戦前の町分地区の土地所有

(単位: m<sup>2</sup>)

所有家	宅地	田	畑	山林	その他	合計
A	431	0	1,626	0	0	2,057
B <sub>1</sub>	1,456	0	7,898	15,587	39	24,980
B <sub>2</sub>	1,189	0	4,632	5,673	6	11,500
C	1,181	669	3,065	1,809	29	6,753
D	0	0	0	0	0	0
E	0	0	0	0	0	0
F	436	0	1,346	4,726	191	6,699
G	498	0	1,503	1,760	10	3,771
H	0	0	0	0	0	0
I	907	0	7,060	23,583	25	31,574
J	937	0	1,678	300	182	3,097
K	1,112	0	4,983	3,132	3	9,229
L	677	0	422	0	0	1,099
N	1,841	0	6,955	22,190	435	31,421
O	473	0	0	1,106	0	1,578
P	218	0	1,045	0	0	1,263
Q <sub>1</sub>	551	136	7,700	5,175	0	13,562
Q <sub>2</sub>	401	0	3,012	6,399	0	9,811
R	161	0	1,437	127	0	1,724
S	390	0	701	2,833	5	3,929
T	369	0	3,871	16,198	0	20,437
U <sub>1</sub>	992	0	4,921	14,148	132	20,193
U <sub>2</sub>	288	0	2,293	2,024	0	4,605
V <sub>2</sub>	854	0	0	0	0	854
V <sub>1</sub>	2,269	0	4,166	31,023	125	37,583
W	301	0	759	0	0	1,060
合計	17,930	805	71,073	157,792	1,180	248,781

(荒川村税務課資料により作成)

園化した。蚕種は、郵便で年一回の注文を取って購入したり、児玉郡や群馬県、長野県から来る行人から買うこともあった。埼玉社白川組では、通常、繭のまま販売していたが、繭の相場に臨機応変に対応し、廉価時には組合で製糸して半分は糸として埼玉社に売るなどした。売の場合は、毎回「せり」が開かれ、買い手がやってきた。使用人は常時2人雇っており、繁忙期には「五月雇い」と呼び、近村から5人ほど雇うことがあった。なかには、秩父郡外から紹介されてやってくる場合もあり、30～40日ほど住み込みで働いた。屑糸も再利用し、地機(いざり機)でそれを織り、自家用の野良着などに利用していた。

以上のように、明治後期から昭和初期にかけて

は、規模の大小はあったものの、町分の大部分の家が養蚕にかかわっていた(第1図)。こうした時期には、山桑を採集して利用することもあった。

第二次世界大戦後になると、町分における養蚕業は次第に衰えた。桑畑を所有する家では、昭和30年(1955)頃までは養蚕を行っていたという。農業センサスによると、昭和45年(1970)の時点で町分で養蚕を行っている農家は1軒に過ぎない<sup>59)</sup>。この家は、平成2年(1990)現在も養蚕が続けているK家である。同家では、自給的に小麦や野菜を作っているほかは、その所有地の大部分を桑畑にしている。現在では年4回の繭取りを行っている(写真4、5)。

これまでみてきたように、荒川において近世期

第5表 現在(平成2年)の土地所有状況

(単位: m<sup>2</sup>)

所有家	宅地	田	畑	山林	その他	合計
A	284	0	1,339	0	36	1,659
B <sub>1</sub>	907	0	5,244	12,663	28	18,842
B <sub>2</sub>	987	0	1,842	830	0	3,654
C	876	318	2,018	520	29	3,761
D	0	0	0	0	25	25
E	305	0	0	0	0	305
F	436	0	1,944	3,157	191	5,728
G	475	0	492	0	5	971
H	549	0	1,194	600	0	2,343
I	856	0	6,707	11,001	0	18,564
J	890	0	1,314	0	8	2,212
K	792	0	4,118	3,132	3	8,044
L	677	0	422	0	0	1,099
N	1,737	0	5,923	1,247	392	9,299
O	473	0	499	1,094	0	2,066
P	218	0	948	0	0	1,166
Q <sub>1</sub>	551	109	7,543	287	0	8,490
Q <sub>2</sub>	389	0	2,885	6,399	0	9,672
R	161	0	1,400	127	0	1,687
S	390	0	701	2,638	5	3,734
T	369	0	3,658	10,766	0	14,793
U <sub>1</sub>	943	0	4,468	12,531	132	18,073
U <sub>2</sub>	288	0	1,968	2,024	0	4,280
U <sub>3</sub>	762	0	0	0	0	762
V <sub>2</sub>	846	0	0	0	0	846
V <sub>1</sub>	329	0	1,545	4,289	0	6,163
W	301	0	715	0	0	1,016
X	204	0	0	0	0	204
合計	15,986	427	58,886	73,305	853	149,457

(荒川村税務課資料により作成)

以来続いてきた養蚕業は、明治後期から大正・昭和初期にかけて隆盛し、昭和7～8年頃の不況以後、衰退の途をたどったのである。

## 2) 宿場としての機能の衰退

大正初期頃、三峰神社の一の鳥居が贅川から大滝村大輪に移転した。大輪は、贅川から6kmほど荒川の上流に位置し、三峰山の登山口に当たる。大正初期に贅川・大輪間に、荒川の谷沿いの道路が開削されたことが理由である。

大正6年(1917)に秩父鉄道が影森(現、秩父市影森)まで開通し、大正8年には、影森・大滝村強石間に乗合バスの運行が始まった。また、昭和

5年(1930)には秩父鉄道が全通し、白久集落に三峰口駅が開設された。このような近代交通機関が整備されるにつれて、三峰神社への所要時間は大幅に短縮され、三峰参詣者も増加した<sup>60)</sup>。しかし、贅川は新たな参詣ルートから外れ、しかも所要時間の短縮のため、宿泊の必要がなくなり、さらに、昭和14年(1939)に大輪から三峰山頂まで、延長約2,000m、比高約700mの三峰山ロープウェイが建設された<sup>61)</sup>。

こうして、明治初期に6軒存在した旅館は、まず、明治後期までに3軒が廃業した。聞き取りによると、宿泊者は、大正期以降急激に減少し、昭和初期以降は三峰参詣者よりも行商人などの利用

第6表 焼畑からの地目変更

字	地番	面積 (m <sup>2</sup> )	地目変更日	現地目
川町	705	499.5	大正15.05.23	山林
玉田林	868	518.3	昭和05.08.30	山林
玉田林	870	500.5	昭和21.02	山林
玉田林	873	810.6	昭和08.09	山林
玉田林	877	113.0	昭和21.02	山林
玉田林	881	806.7	大正15.05.25	山林
玉田林	883	914.7	昭和21.02	山林
玉田林	887	1906.7	昭和08.09	山林
玉田林	888	218.0	昭和08.09	山林
玉田林	890	509.4	昭和08.09	山林
玉田林	894	1011.8	大正12.06.30	山林
向原林	903-1	398.4	大正15.05.25	山林
栃沢	915	210.1	昭和21.02	山林
栃沢	919	4960.9	昭和10.07	山林
栃沢	920	1416.1	昭和21.02	山林
栃沢	922-1	2601.4	大正15.03.31	山林
栃沢	925	1303.2	大正15.05.25	山林
栃沢	929	408.3	昭和10.11	山林
栃沢	931	594.6	昭和21.02	山林
栃沢	933	2001.8	明治45.06.30	山林
栃沢	935	2590.5	大正15.05.25	山林
栃沢	937	321.1	昭和21.06.10	山林
栃沢	939	215.0	昭和21.02	山林
栃沢	941	2985.9	昭和15.11	山林
栃沢	945	11.9	昭和21.02	山林
栃沢	949	102.1	大正12.06.30	山林
笹平	952	127.8	大正12.06.30	山林
笹平	959-1	310.2	昭和08.03.08	畑
笹平	964-1	911.7	昭和08.03.08	畑
笹平	966-1	399.4	明治45.06.14	山林
笹平	968-1	1795.7	昭和06.01.30	山林
笹平	978	993.0	昭和35.08.30	畑
合計面積		32468.1		

(浦和地方法務局秩父支局所蔵「土地台帳」により作成)

第7表 昭和2年度白川組生糸売行状況

種 別	査定糸量	精算糸量
	(貫・分)	(貫・分)
春白繭糸第一期	236.7140	231.4545
秋白繭糸第一期	199.1445	192.2095
黄繭糸第一期	75.3160	73.7075
三黄繭糸第一期	11.2750	11.1280
合 計	522.4495	508.4995

(『荒川村誌 資料編(二)』(資料11)により作成。)

注) 白川組は器械製糸のみで、座繰製糸は行っていないかった。



写真4 現在の養蚕農家  
(1990年6月13日撮影)

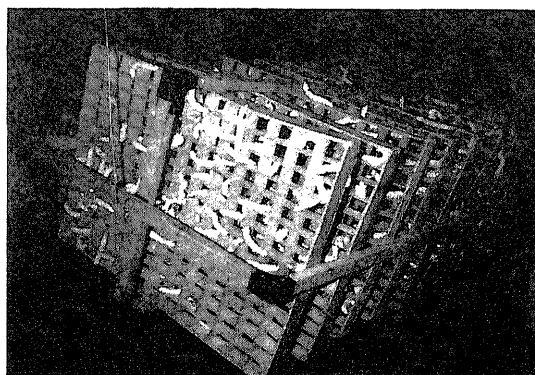


写真5 上簇後の蚕  
(1990年6月13日撮影)

の方が多かったという。昭和44年(1969)まで営業を続けた「逸忠館」では、第二次大戦前頃までは三峰参詣者や葉の行商人などの宿泊が多く、数人の女中を雇うほどだったが、戦後、宿泊者は減少し、廃業直前の昭和40年頃には、登山者や高校生の合宿などが多かった。

このように、贅川の宿場としての機能は、明治後期には既に衰退し、第二次世界大戦前の鉄道開通や自動車といった近代交通機関の整備に伴って、消滅したと考えてよからう。

### 3) 山林利用の変化

まず、町分地区の明治初期、第二次世界大戦前、現在(1990年)の3時点における山林所有の状況を

第8表 白川村内組合製糸販売数・金額

組合名	昭和4年度(1929)			昭和5年度(1930)		
	生糸販売数量 (貫)	生糸販売金額 (円)	一釜当生産額 (貫)	生糸販売数量 (貫)	生糸販売金額 (円)	一釜当生産額 (貫)
二見組	234.164	18225	4.5032	270.799	11563	5.2077
白川組	511.399	38751	9.6490	394.792	16737	7.4489
日向組	140.556	10046	—	195.091	6773	—

(『荒川村誌 資料編(二)』(資料20)により作成)

比較してみよう(第3表～第5表)。明治初期には、V家の山林所有が圧倒的であった。ところが、第二次世界大戦前には他の山林所有者も、個々の所有規模を急激に拡大している。そして、現在は、各山林所有者は規模を縮小して、多くを手放した。聞き取りによると、昭和25年(1950)前後頃に、植林が盛んになった。しかし、昭和30年代後半になって、秩父セメント(株)が笹平地区において石灰石の採掘を始め、それに伴って多くの山林が秩父セメント(株)へ売り渡されていく。高度成長期を迎えると同時に、山林利用の比重も低下していったとみることができる。たとえば、Q<sub>2</sub>家は、明治期にQ<sub>1</sub>家から分家し、第二次大戦前後から現在まで6,400m<sup>2</sup>程度の山林を所有している。しかし、現在、山林への依存度はさほど大きなものではない。

B<sub>1</sub>家でも、町分区域において明治初期には20m<sup>2</sup>にすぎなかった山林が、植林が盛んになった第二次大戦前後には15,587m<sup>2</sup>にまで急増している。同家からの聞き取りによると、町分に限らず、日向、古池、白久、猪鼻の方まで広く所有を伸ばしたという。しかし、現在では12,663m<sup>2</sup>と若干の減少がみられる。このように、明治初期から第二次大戦前後に山林所有の伸長がみられる家は、町分で13軒も存在する。そして、そのうち11軒までが現在は山林所有を減少させているのである。Q<sub>1</sub>家は、明治期に分家を出したとはいえ、現在の山林所有規模は、第二次大戦前後の時期の6%弱にまで激減しており、G家などは、町分区におけるすべての山林を手放してしまっている。

近世期以来、筏流しに頼っていた木材輸送の形態も変化している。昭和15年(1940)頃、荒川上流



写真6 三峰口駅に併設する木材積出施設  
(1990年11月11日撮影、現在は材木の集積場として利用され、輸送はトラックで行う)

に昭和電工の水力発電所の取水口が設けられ、水量が激減したため終止符が打たれた。また、大正期頃からは馬を用いた陸上輸送も盛んになってくる。賛川村にも馬方が20人ほどおり、小荷駄や馬車によって秩父・大滝間を運搬した。また、昭和5年に秩父鉄道が全通すると、賛川より下流域への輸送は、鉄道を用いて活発に行われるようになった。最盛期は昭和15～30年(1940～1955)頃で、木材積み出し専用のヤードも建設された(写真6)。その後の道路の改良や、昭和59年(1984)の鉄道貨物輸送の大幅な整理統合などによって、現在ではすべてトラックによる輸送に変わっている。

#### 4) 生業形態の変化のパターン

これまでの考察の中で、近世期から小中心地として存在していた賛川の「町」的機能は、既に昭

和初期にはほとんど消滅したが、宿屋や商店などの商業・サービス業に従事していた人々に注目してみると、それらの人々が廃業と同時に転出していったのではなく、様々な生業形態を組み合わせ、変化させながら生きてきたことがわかる。

まず、町分地区における生業形態の変化を、いくつかの事例をあげながらみていこう。

近世期から「丸太」という宿屋を営んでいたI家の場合、天保12年(1841)生の平二郎氏の代までは、宿屋を生業にしていた。次代の万延元年(1860)生の権十郎氏の代に宿屋を廃業し<sup>62)</sup>、そのころまでに集めた土地(畑9,019m<sup>2</sup>、山林8,133m<sup>2</sup>)を利用した山林利用と、養蚕に生業の主力を移した。さらに、明治23年(1890)生の保平氏および、現在の当主の正一氏(明治45年生)の代には、農業・養蚕・林業を行った。I家の場合は、最盛期の第二次世界大戦前には31,574m<sup>2</sup>(うち、畑7,060m<sup>2</sup>、山林23,583m<sup>2</sup>)という土地を所有しており、当時、町分集落の中では第1位である。このような所有耕地に支えられた専門的な農林業は、町分集落においては特殊な例といえよう。

また、Q<sub>1</sub>家の場合、江戸時代生まれの庄三郎氏は雑貨商を営んでいたが、明治2年(1869)生の

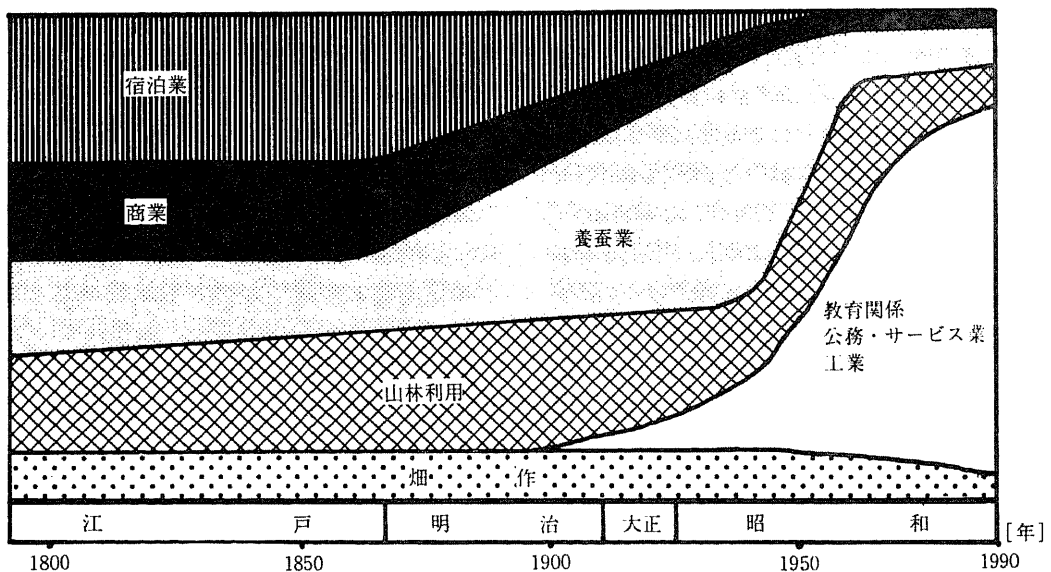
玉三郎氏の代になって、明治中期頃廃業し、養蚕を主力にした。こうした生業形態は、次代の金三郎氏(明治24年生)の代も続いたが、現在の当主の邦武氏(大正11年生)の代には、中学校教員の傍ら農業も続けた。

また、旧一の鳥居の前で大規模に旅館を経営していたA家では、江戸時代から旅館「角屋」を経営していたが、明治後期に先々代は教員になり、大正期まで宿屋を営業していたものの、その後、教育関係の職についた。

これまでの考察から、町分における生業形態の変化を模式的に示すと、第6図ようになる。

おそらく中世期に三峰参詣者や甲信地方への旅行者の宿場として成立したと推定される町分は、次第に中心機能を集積し、中・近世期には秩父郡内における重要な「町」としての機能を果たしていた。賛川の人々の多くは、町分集落では宿屋や商店といった生業に従事していた。また、日向集落では、山林の伐採、炭焼きや、筏流しなどの流通部門に携わることによって生計を維持してきた。

明治期になって、近代的な交通機関が発達してくると、宿場としての機能や輸送に対する賛川の需要が次第に減少し、それに伴って、宿屋や商店



第6図 町分地区の生業形態の変化

を廃業する者が増えてきた。彼らの多くは、明治期以降盛んになってきた養蚕を代替の生業形態として選択した。また、養蚕と同時に、秩父セメントや、昭和電工といった近代産業に従事するものも増え、現在も、それらの関連会社へ勤務するものが多い。しかし、それにも増して注目すべきは、小・中学校の教員や市町村の教育委員会に勤めるものが多いことである<sup>63)</sup>。現在の町分の32軒中7軒が、何らかの形で教育関係の職業に従事している。このうち多くは2代前からの教員という例が多く、そのことは、既に明治期には教育関係の職業に転換していたということを示している。こうした、とりわけ教育関係を中心とした公務や、近代産業への従事の傾向は、既に、明治後期にみられ、第二次世界大戦以降、一層強まった。

いずれの時期においても、贅川の生業のなかでの畑作農業の意義は、昭和初期まで行われていた山間部での焼畑を加えても、大きいものではなかった。現在の贅川において見られる粗放的な畑地の利用は、必ずしも近年の農業労働力の減少傾向によるものではない。近世期以来一貫した畑作農業の比重の低さによるものと考えられる。

## VI 小中心地、贅川の変容と生業形態の変化 むすびにかえて

秩父盆地南西部の小中心地である贅川の商業・サービス機能は、昭和初期に街道交通から鉄道交通への変化によって、まず三峰口駅前集落への商業機能の集積とともに減少した。そして、近世期以来の宿場町としての贅川の機能が衰退した。さらに、高度成長期以降のモータリゼーションによって、上位中心地である秩父市へのアクセシビリティが向上すると、生活行動圏が広がり、鉄道開通に伴って出現した駅前集落が衰退した。

このように、秩父郡内の中心地システムの一部をなす贅川周辺の中心地の動きは、主として交通体系の変化によるところが大きい。しかし、個別中心地の変容を考える際には、こうした外的要因の指摘に留まっていたのでは片手落ちであって、そこ

には、山間村落贅川特有の事情が存在していたと考えるべきであろう。そこで、本稿ではさらに、贅川の中でも中心機能が集中していた町分における生業形態の変化という側面から考察を進めた。

耕作可能地面積の少ない贅川においては、村の成立当初から畑作農業に依存するのみでなく、それ以外の生業を組み合わせ生きてきた。近世期においては宿屋、山林利用、養蚕、筏流しなどであり、その時期には秩父盆地南西部の小中心地としての機能を持っていた。山林は、それ自体で木材や薪炭という商品的な価値を生み、また、荒川が交通・流通の場として活用され、江戸という大消費地と直結される時、贅川村に貨幣経済が流れ込み、大きな貨幣の循環の中に取り込まれていくのである。贅川のような山間村落にあっても、自然的条件、社会的条件など、様々な条件が有機的に絡み合っており、その土地にふさわしい生業のパターンを作りだしていたと言えよう。

明治期以降の交通体系の変化に伴って、贅川に対するそれらの需要が減少してくると、比較的早い時期に、公務・教育関係や、セメント工業といった近代産業への従事などへ転換していった。また、逆に交通体系の変化が、秩父市などへのアクセスを容易にし、生業の転換を支えた。

贅川は、近世期以来、ある特定の生業形態に完全に依存するのではなく、その時期に適した様々な生業を組み合わせ生きてきた。諸国の旅人や参詣者が宿泊する宿場や、江戸と直結した材木取引を行うなど、外部との交渉が比較的多かっただけに、江戸や各国の情報や話題が比較的伝わりやすかった。そうした村の雰囲気や、村人の目を外部の世界へ向けさせた。こうした外部への好奇心と、贅川に定着し先祖代々の土地を守りつつ生活の糧を得ようとする意欲によって、明治期以降は地元で職場を得やすい教職が志向され、教育へ熱意が注がれたのではないだろうか。

我々は往々にして、美田の広がる穀倉地帯や平場農村にこそ、より豊かな理想的な村落のイメージを抱きがちである。農産物の非生産性をもってして、山間村落をより貧困な、後進的な村と捉え

てしまう傾向がある。しかし、安定的な農業生産が不可能な村落ほど、新しい、より有利な生業形態を導入できる素地があると考えられることも可能なのではなかろうか。

現在、贅川の居住者の多くは所有地を減少させている。確かに、これまで見てきたように、山林や畑といった土地に依存しない生業になりつつある。しかし、所有地の減少は、人々の村への定着の意欲を減少させる。事実、秩父市や東京などの都市部に移転する若者が増えてきている。様々な生業のパターンを組み合わせる脈々と生きてきた村が、都市部の生活の便利さの陰で放棄されつつある。これこそ、山間村落の危機と言えるのではなかろうか。

## 付 記

本稿の作成にあたって、現地調査の際には、荒川村教育長の逸見榮夫氏、町分区の新井理一氏にご助力いただきました。また、資料収集の際には荒川村税務課、荒川村歴史民俗資料館、浦和地方法務局秩父支局、秩父農工高等学校の方々にお世話になりました。また、磯田才治氏には貴重な資料を提供していただきました。また、筑波大学人文学類の請川竜司・清水芳江・中野渡一耕・藤川清美・三木一彦・小池太郎、同比較文化学類の池田孝子・酒井貴己子・松本恵美の各氏には、実地調査および資料整理等に協力いただきました。以上の方々に深く感謝いたします。

なお、補充調査等の際に、平成元・2年度文部省科学研究費奨励研究(A)『わが国における明治期以降の中心地システムの変容』(研究代表者:河野敬一、課題番号01790590)の一部を使用しました。

## 注

- 1) 新井重三・菅野三郎(1960): The Tertiary System of the Chichibu Basin, Saitama Prefecture, Central Japan, 学術振興会, 396ページ。
- 2) ここでは、商業、サービス業、行政機能、交通・通信機能などの非農業的機能を総称して中心機能とする。
- 3) 河野敬一(1990): 明治期以降の長野盆地における中心地システムの変容, 地理学評論, 63A, 1~28。

- 4) 埼玉県(1980): 『新編埼玉県史・資料編6 中世2』, 埼玉県, 170~171(資料354)。
- 5) 埼玉県(1988): 『新編埼玉県史・通史編3 近世1』, 埼玉県, 67~68。
- 6) 荒川村誌編纂委員会(1977): 『荒川村誌 資料編』, 荒川村, 448~449(資料23)では、寛政5年(1793年)の史料に「日向村」と明記されている。このことから、当時、厳密には贅川町と日向村を明確に区別していたことがわかる。
- 7) 内務省地理局(1884): 『新編武蔵風土記稿・第十二巻』(『大日本地誌大系18』, 雄山閣復刻, 1972), 301ページ。
- 8) それぞれの組ごとに名主等の役をおいた。
- 9) 村役を年番で勤めたことに由来する。
- 10) 前掲7), 64~65。
- 11) 前掲7), 66~67。
- 12) 清水武甲・千島寿(1983): 『ふるさとの思い出・写真集・秩父』, 国書刊行会, 126ページ。
- 13) ここでは養蚕を含めて農業とした。なお、第1図では、養蚕を生業の主体としている家を示した。
- 14) 秩父大宮から贅川へ行くには、渡船で荒川を越えなければならなかった。
- 15) 明治23年(1890)の人口規模は、旧贅川村822人、旧白久村853人であった(『明治二十四年徴発物件一覧表』による)。
- 16) 現在の白川橋より150mほど下流に架橋された。当初はつり橋であったが、4t程度の車の通行が可能だった。
- 17) 開駅以前の三峰口駅周辺は、畑と水田が広がり人家はなかった。
- 18) ただし、現在のようにアスファルト舗装されたのは昭和40年代のことである。
- 19) 荒川村商工課によると、荒川村の大部分は秩父市の一次商圏に含まれる。
- 20) 厳密な町分地区の地域設定はできないが、荒川村および居住者からの聞き取りによって設定した。
- 21) 浦和地方法務局秩父支局所蔵「土地台帳」。
- 22) 荒川村税務課資料。現況地目を用いたのは、山間部の場合、台帳地目が現況と異なる場合が多いからである。
- 23) 磯田才治家文書(慶應元年11月)。
- 24) 前掲7)。
- 25) 磯田才治家文書「乍恐以書付奉願上候」(天保4年12月)。
- 26) 前掲7), 301ページ。
- 27) 磯田才治家文書「丑御年貢可納割付之事」。
- 28) 前掲25)。
- 29) 埼玉県(1954): 『武蔵国郡村誌 第7巻』, 埼玉県立図書館, 237ページ。

- 30) 陸軍参謀本部(1880):『其武政表・上』。
- 31) 磯田才治家文書「乍恐以書付奉願上候」(天保14年9月)。
- 32) 桜井徳太郎(1958):『日本民間信仰論』,雄山閣,174~178。
- 33) 近世期には、一の鳥居は、対岸の白久村にあったとする説もある。
- 34) 荒川村誌編さん委員会(1983):『荒川村誌』,荒川村。
- 35) 磯田才治家文書「乍恐以書付御願奉申上候」(年不詳,江戸時代)。
- 36) 前掲6), 86~87(資料41)。
- 37) 前掲30)。
- 38) 前掲21)。
- 39) このうち、町分地区の所有山林は3.4町程度で、これは町分地区の山林の40%にあたる。
- 40) 家の略号は第3表~第5表に対応する(以下同様)。
- 41) 秩父地域の薪炭生産と流通については、中紀雄(1986)の詳細な研究がある。  
中紀雄(1986):『近世における秩父地域の薪炭生産と流通の研究——忍藩秩父領と天領「大滝村」を中心に——』(昭和60年度埼玉県教育委員会長期研修教員報告),133ページ。
- 42) 埼玉県(1982):『新編埼玉県史・資料編21 近代・現代3 産業・経済1』,埼玉県,517ページ(資料108)。
- 43) 前掲36)。
- 44) 埼玉県(1982):『新編埼玉県史・資料編16 近世産業・経済』,埼玉県,890ページ(資料275)。
- 45) 前掲42), 346ページ(資料91)。
- 46) 前掲30)。
- 47) ここでは、あくまでも台帳上の畑地所有面積であり、必ずしも経営規模や内容を示すものではない。しかし、他に経営の状況を知り得る資料がないので、聞き取りをふまえて畑地所有の変化の意味を考察した。
- 48) 土地の地目として「焼畑」が存在する。
- 49) 磯田才治家文書「乍恐以書附奉願上候」(天保4年2月)。
- 50) 佐々木高明(1972):『日本の焼畑』,古今書院,146~155。
- 51) 藤田佳久(1981):『日本の山村』,地人書房,185~198。
- 52) 新井寿郎(1963):埼玉県の養蚕地域の変貌,埼玉大学紀要,12, 31~32。
- 53) 荒川村誌編纂委員会(1977):『荒川村誌 資料編(二)』,荒川村,500~507(資料4)。
- 54) 前掲53), 571ページ(資料26)。
- 55) このころ、町分の埼玉社白川組のほか、日向地区の埼玉社日向組、白久地区の埼玉社二見組が成立していた。
- 56) 前掲53), 514ページ(資料11)。
- 57) 前掲53), 521~522(資料16)。
- 58) 「製糸組合指示並協議事項」〔前掲53), 531~535(資料21)〕では当時の埼玉県下の状況を次のように記している。  
「県下重要産業タル養蚕ハ未曾有ノ財界不況ト、数年来極度ノ繭糸価ノ暴落ニ遭遇シ為ニ養蚕家ノ苦境其ノ極ニ達セリ」。  
養蚕に重きを置く秩父郡農村が、この時期大きな打撃を受け、必死に打開策を見いだそうとしている苦境がうかがえる。
- 59) 1985年世界農林業センサス。
- 60) 前掲32), 176ページによると、三峰講員参拝者数は、昭和5年(1930)には明治元年(1868)の2.3倍の28,710人であった。
- 61) 徒歩により2時間かかっていたものが、僅か8分に短縮された。
- 62) 明治10年代と推定される。
- 63) たとえば、近年では、荒川村や秩父市の教育長を輩出している。